朝日新聞 13.1.21 第3種郵便物認可

防災 復興

消防隊員に残るストレス

災害や事故の悲惨な現場で、救助・捜索活動にたずさわる消防隊員たちの惨事ストレス＝🔗。命を救えなかった自責の念や無力感、被災した自らの家族を思う心の叫びをどのようにケアしていけばいいのか。総務省消防庁の新たな取り組みには、課題も残る。

命救えぬ無力感…通院も

「家族の安否を考えると心配で一睡もできず活動した」「阪神大震災のニュースを見て消防士を志したが、あの日ほど無力さを感じた日はない」

津波で隊員3人が犠牲になった岩手県の釜石大槌地区行政事務組合消防本部は昨秋、隊員の手記と活動記録を収めた冊子「猛威への挑戦」をまとめた。

当時の記憶を風化させまい、と製作を呼びかけたのは菊池忠男・釜石消防署長(59)。自身も釜石市にあった3階建て庁舎で津波に襲われた。

トラックを押し流す真っ黒な水の壁から逃げようと屋上に駆け上がった。「助けてくれ！」。電柱につかまった男性が大声で助けを求めていた。隣のビルからは「人が流されている」と叫ぶ声が聞こえるが、身動きできなかった。「助けたかった。せめて避難させられなかったかと思うとふがいない」と自分を責めた。

その後、市内にある県の合同庁舎で指揮を執った。夜は事務用の椅子にもたれて仮眠するが、なかなか眠れない。隊員たちの中には家族の安否がつかめていない人も多く、いら立って救助方法などを巡って言い争うこともあったという。

30代の隊員は実家を流され、親族をとくしたが、避難所の患者の救急搬送を続けていた。次第にふさぎ込むようになり、仕事を数カ月休んだ。今も通院が欠かせない。

菊池署長は隊員の心のケアを含めた後方支援の必要性を訴える。「発生から約1週間後、大阪から応援に来た消防隊に『みなさんを休ませるために来ました』と言われ、ようやく救われた気持ちになった」

総務省消防庁が昨年、47都道府県に実施した調査では、消防隊員に対するカウンセリングや研修などの惨事ストレス対策が導入されているのは約2割。東日本大震災後に実施したのは約1割にとどまっていた。

倒壊した建物から遺体を運び出す釜石消防署員ら＝2011年3月21日、岩手県釜石市鵜住居町、釜石消防署提供

惨事ストレス

悲惨な災害・事故現場に立ち会い、職務を果たせなかったと感じたり心的衝撃を受けたりして起こる不眠、気分の落ち込み、フラッシュバックなどのストレス反応。消防隊員や警察官、災害ボランティアらに症状がみられる。消防隊員の惨事ストレスは、阪神大震災のほかに地下鉄サリン事件でも注目された。

消防庁 ケアに本腰

惨事ストレスが注目された1995年1月の阪神大震災。この震災で活動にあたった兵庫県尼崎市消防局の榊雄志さん(44)は、東日本大震災の被災地・宮城県山元町でも行方不明者の捜索に携わった。

がれきの山が広がる惨状に、部下の隊員たちはぼうぜんとしていた。そこで、隊員たちの不安や不満を夜遅くまでじっくり聞いた。

家族のことを心配しながら疲れ切った体で捜索にあたる仲間と触れ合い、言葉を交わし続けた阪神での経験を生かしたという。

榊さんは「活動中に事故を起こさないよう、心と体のケアに相当注意した。自分の体験から、気持ちに余裕をもたせるには隊員同士で話し続けるのがいいと思った」と話す。

東日本大震災でも浮き彫りになった惨事ストレスの問題。消防庁は新年度から消防隊員向けの対策に本格的に乗り出す。隊員の家族が心配や不安からうつ病などの症状が出る可能性を考慮し、家族向けに説明する体制も整えることにしている＝図。

対策の拡充を求める声もある。兵庫県こころのケアセンター（神戸市）の主任研究員大澤智子さん(46)は2007年、同市消防局の隊員765人にアンケートした。阪神大震災の発生当日に家族の安否確認ができていない隊員ほど、当時を思い出しつらさを感じるなど惨事ストレスの影響が長期間残っていたという。

東日本大震災でも消防庁の緊急時メンタルサポートチームの一員として被災地に入った。「阪神と同様、発生直後に家族の安否確認ができずショックが残る隊員が多かった」と共通点を指摘。「隊員の家族の安否確認を対策に盛り込むよう消防庁に働きかけたい」と話している。

総務省消防庁の惨事ストレス軽減支援策

- 都道府県ごとに精神科医や臨床心理士ら専門家を1人以上配置。隊員向けの研修会を各消防学校で開く
- 現場に専門家を派遣し、個別面談を通じて不安を取り除く
- 地元の消防団員向けの訓練カリキュラムに惨事ストレス講習を組み込む
- 隊員や家族に起きうる症状について家族向けに説明する体制の整備
- 「緊急時メンタルサポートチーム」を増員